

高等学校「言語文化」古典における 生徒が自分の考えを形成する授業に関する研究

—複数のテキストを読み比べ、比較して論じる言語活動を通して—

【研究の概要】

高等学校「言語文化」では、生徒が言語活動を通して、我が国の言語文化について自分の考えをもつ資質・能力を育成することが重視されている。本研究では、この資質・能力を育成するため、時代の異なる複数のテキストを読み比べ、比較して論じる言語活動を中心とする単元を構想し、授業を実践した。分析の結果、生徒は我が国の言語文化について自分の考えを形成し、理解を深め、学習意欲を向上させたことが分かった。

キーワード：考えの形成 講義調の伝達型授業からの脱却

令和6年3月

岩手県立総合教育センター

長期研修生

所属校 岩手県立盛岡第一高等学校

菅原 将成

目次

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	1
IV	研究の方法	1
V	研究の構想	2
1	研究についての基本的な考え方	2
(1)	「考えの形成」について	2
(2)	我が国の言語文化について	3
(3)	言語活動について	3
2	研究の手立て	3
(1)	時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果	3
(2)	比較して論じる活動の効果	5
3	検証計画	5
4	研究構想図	6
VI	授業実践と授業の考察	7
1	授業実践計画	7
2	実践構想	7
(1)	単元の目標及び評価規準について	7
(2)	言語活動について	7
(3)	教材の選定について	8
(4)	単元の指導と評価の計画について	9
(5)	手立てを具体化する方策について	9
3	各単位時間の授業の実際	10
(1)	第1時	10
(2)	第2時	11
(3)	第3時	13
(4)	第4時	15
4	授業実践の検証	16
(1)	時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果	17
(2)	比較して論じる活動の効果	19
(3)	我が国の言語文化について自分の考えをもつことができたか	21
(4)	学習意欲を喚起できたか	22
(5)	有意差が顕著に出た質問について	24
VII	研究のまとめ	25
1	全体考察	25
2	研究の成果	25
3	今後の課題	26
VIII	引用文献および参考文献	27

I 研究主題

高等学校「言語文化」古典における生徒が自分の考えを形成する授業に関する研究
—複数のテキストを読み比べ、比較して論じる言語活動を通して—

II 主題設定の理由

平成28年中央教育審議会答申（以下「答申」という）を受けて高等学校学習指導要領が改訂され、国語科においては「言語文化」が新設された。高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説（以下「解説」という）によると、「言語文化」は「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目」（「解説」：10）である。「言語文化」では、生徒が古典から近現代までの幅広い作品に触れ、我が国の言語文化について自分の考えを形成することにより、我が国の言語文化への理解を深め、古典に対する学習意欲を高めることが期待されている。

その背景には、主に答申の2点の指摘がある。1点目は、「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある」（「答申」：124）ことであり、2点目は、「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと」（「答申」：127）である。この2点を指摘した上で、国語科における学習活動は「言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を通じて行われる必要がある」（「答申」：127）と示している。特に古典は、教師が主導して古典文法や訓読の仕方などを習得させ、教材の内容を正確に読み取っていく「講義調の伝達型授業」になる傾向が強い。古典を扱う「言語文化」では、生徒が主体となって話し合ったり、発表したりしながら我が国の言語文化について自分の考えを形成する言語活動を行うことが一層求められている。

しかし、本研究を進めるにあたって本県高等学校の国語科教員を対象に実施したアンケート調査によると、言語文化を理解するために言語活動を行ったと答えた教員は23.1%（33人/143人）にとどまった（補助資料p.14質問14参照）。本県においても、我が国の言語文化について自分の考えを形成するための言語活動が広く行われているとは言えない実態が明らかとなった。その要因としては、答申でも指摘された「講義調の伝達型授業」が考えられる。「講義調の伝達型授業」では、限られた単位数の中で生徒の主体的な言語活動の時間を確保することは難しい。

そこで、本研究は、生徒が言語活動を通して、我が国の言語文化について自分の考えを形成し、理解を深める授業の一例を示すことで、教材への依存度が高い「講義調の伝達型授業」を脱する授業改善に資することを目指す。

III 研究の目的

本研究は、高等学校「言語文化」において、生徒が異なる時代に成立した複数のテキストを読み比べ、比較して論じる言語活動を通して、我が国の言語文化について自分の考えを形成し、理解を深める授業の一例を示し、「言語文化」の充実に資することを目指す。

IV 研究の方法

「言語文化」の指導における課題や複数のテキストを用いた授業の効果を実態調査及び先行研究

によって明らかにし、「言語文化」の充実のために必要な授業の在り方を考察し、構想・実践する。授業内での生徒の発言・記述等や、実践の前後に行う生徒を対象としたアンケート調査の分析などを踏まえ、授業実践について振り返り、その成果と課題を示す。

V 研究の構想

1 研究についての基本的な考え方

(1) 「考えの形成」について

本研究は、「言語文化」の「B 読むこと」において「考えの形成・共有」の資質・能力を育成する授業を構想・実践する。

現行の学習指導要領では、国語科の全ての領域（注1）においてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、学習過程が整理・明確化されている。「読むこと」の学習過程は、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」及び「考えの形成・共有」である。

「B 読むこと」に関する学習過程及び指導事項は表1の通りである。

表1 『解説』 pp. 126-131を基に筆者作成

学習過程	構造と内容の把握	精査・解釈	考えの形成・共有
指導事項	ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。	イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。 ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。 エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。	オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

「考えの形成・共有」に関する「指導事項 オ」について、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるとは、

作品を読み深めて、単に内容を捉えたり解釈を深めたりすることにとどまらず自分が対象をどのような視点、観点、立場によって、どのような感性や感情をもって、どのような認識や解釈の仕方によって捉えるかという、対象に対する向かい方自体の深まりを意味している。（「解説」：131）

と説明されている。

また、自分の考えをもつとは、「我が国の言語文化を継承していく一員として、我が国の言

語文化についての自分なりの考えをもつこと」（「解説」：131）であると説明されている。

つまり、「考えの形成」とは、内容の把握や解釈の深化にとどまらず、我が国の言語文化を継承する一員として自分なりの考えをもつことであると考えられる。

（2）我が国の言語文化について

我が国の言語文化は、

我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。（「解説」：111）

と説明されている。

このことから我が国の言語文化は、「文化としての言語」「文化的な言語生活」「多様な言語芸術や芸能」の3点に整理できる。

本研究では、我が国の言語文化である和歌について、考えを形成する授業を構想・実践する。

（3）言語活動について

本研究は、「言語文化」「B 読むこと」の言語活動例（2）のウ「異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動」（「解説」：133）と関連した言語活動を行う。これについては、

異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする言語活動を示している。

時間軸の視点から、設定したテーマに基づいて作品や文章を通史的に比較し、それらの共通点や相違点を明確にし、その一貫性や変化の過程を自ら考える活動が考えられる。（「解説」：133）

と説明されている。

我が国の言語文化について自分の考えを形成するためには、時代の異なる複数のテキストを用いて、時間軸の視点から通史的に比較する上記の言語活動を行うことが効果的であると考えられる。

2 研究の手立て

我が国の言語文化について自分の考えを形成するために、「時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動」と「比較して論じる活動」を行う。

（1）時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果

ア 我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えやすくなる

「言語文化」は、上代から近現代までの我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を

置いている。

そこで、一単元において、上代から近現代までの多種多様で価値ある作品や文章を一体的に取り扱い、読み比べることで、共通点や相違点を関連付けたり、整理したりしながら、我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えやすくなるものと考えられる。

また、現在、学校や社会における様々な場面で、情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を育成し、活用することが求められている。例えば、令和6年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法及び問題作成方針（別添）（1）国語には、

言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。〔中略〕問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせ、複数の題材による問題を含めて検討する。

とある。実際にこれまでの共通テストにおいても、複数のテキストを読み比べ、情報を多面的・多角的な視点から解釈する問題が多く出ている。

このような背景から、「言語文化」においても、複数のテキストを読み比べる言語活動を行うことが肝要である。

イ 主体的に読む姿勢を養うことができる

複数のテキストを読み比べることで、生徒の主体的な読みを促し、教師主導の「講義調の伝達型授業」から生徒主体の授業へ転換することができると考えられる。

船津（2010）は、井上一郎の読書に関する一連の研究を踏まえ、複数のテキストを読み比べることの意義について、表2の3点をあげている。

表2 船津啓治（2010）『比べ読みの可能性とその方法』p.74を基に筆者作成

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 一教材だけに時間をかけて行う授業からの脱却を図ることができること② 複数の教材を扱うことになり、必然的に何のために比べるのかという目的をもつことになること③ 目的が明確であると、子どもの意欲は高まり、自主的に活動するようになること |
|---|

また、高等学校「言語文化」において複数のテキストを読み比べた先行研究として一瀬（2021）並びに大島（2021）の研究がある。一瀬は古典と現代文を読み比べて共通する題材の描かれ方のつながりや違いについて考えさせる授業を実践した結果、「文章を読解するための読み方、注意すべき点に生徒が自ら気づくという効果も発見することができた」（一瀬、2021：186）と述べている。大島は古典の意識を読み比べて解釈の多様性に気付かせる授業を実践した結果、「内容を理解してから知識を身に付けるという、従来とは逆転した授業展開を試みることも、古文単語や文法事項を学ぶ動機付けの一手段になり得る」（大島、2021：24）と述べている。読み比べる対象や目的は本研究と異なるが、「言語文化」において読み比べる活動を行うことで、読み方や注意すべき点に自ら気づき、知識として身に付けようとする主体的な姿勢を涵養できるとしている。

このことから、複数のテキストを読み比べることにより、比較する目的に沿って内容を的

確に把握する必要が生じるため、読解するための知識・技能を生徒が自ら調べ、獲得していく主体的な読みを促すことが期待できる。そして、生徒が主体的に読むようになれば、教師が主導して品詞分解と現代語訳を行う「講義調の伝達型授業」を脱却できると考えられる。

(2) 比較して論じる活動の効果

読み比べて把握した共通点や相違点を基に、「比較して論じる」言語活動を行うことによって、生徒の考えを効果的に形成することができると考えられる。

本研究で「比較して論じる」とは、生徒それぞれが複数のテキストを読み比べて気付いたことや考えたことを話し合うことである。内容の把握や解釈の深化にとどまらず、我が国の言語文化について自分の考えを形成するためには、主体的な読みを通して獲得した情報を外化する場面が必要になる。お互いの気付きや考えを外化することで、自己と他者の読み取りの差異に気付き、相互に影響を与えながら、より一層思考を深められるものと考えられる。

3 検証計画

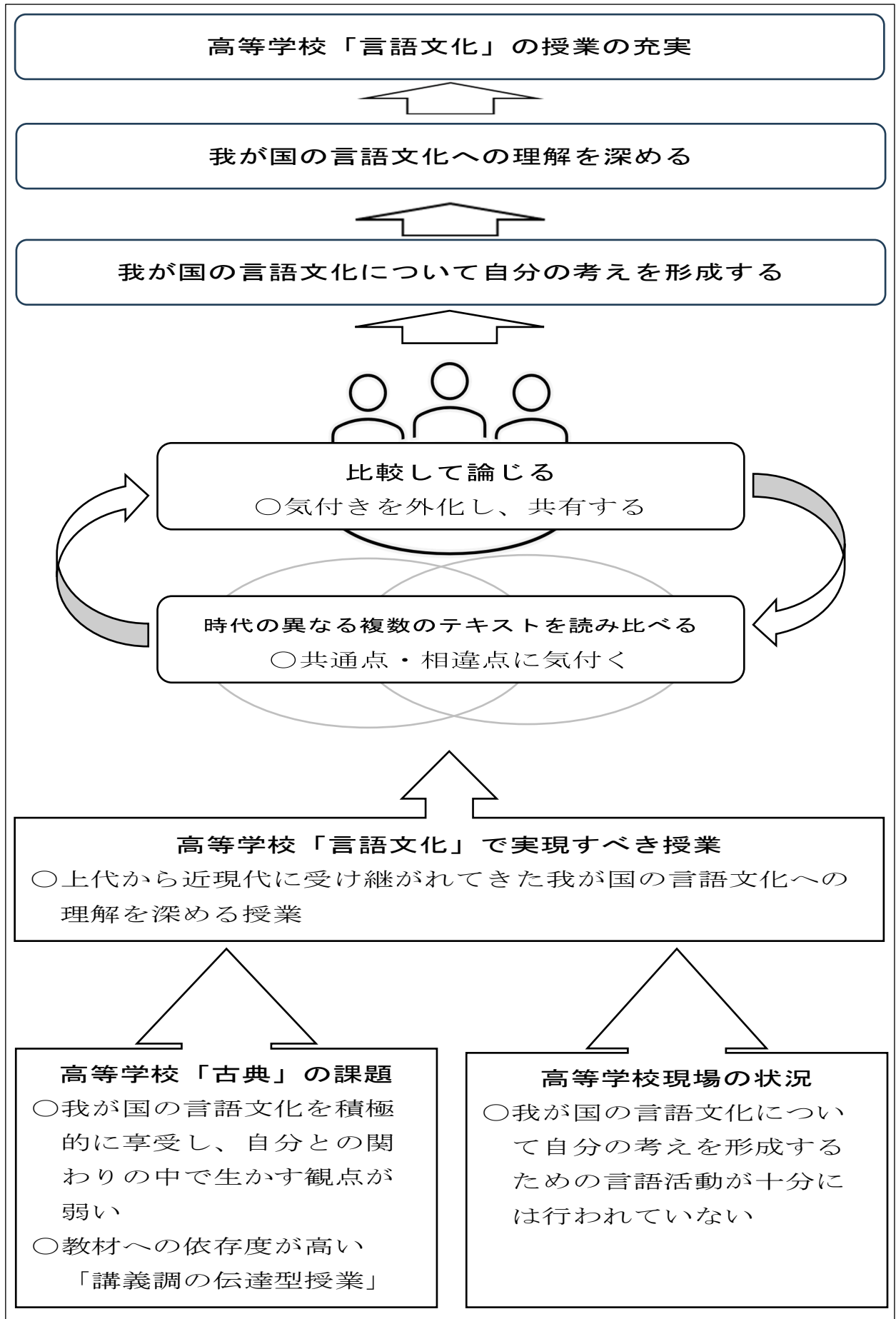
授業内で行う学習シートの記述内容の分析、また、映像や音声による授業記録の分析、授業実践の前後に実施する生徒を対象としたアンケート調査結果の分析を通して、「読み比べ、比較して論じる」言語活動が我が国の言語文化について自分の考えを形成することに有効であるか検証する。

表3は、「VI 授業実践と授業の考察 4 授業実践の検証」(pp.16-24)における「研究の手立て」と「生徒を対象としたアンケート調査」との関連を示したものである。

表3 「研究の手立て」と「生徒を対象としたアンケート調査」の関連

4 授業実践の検証 (pp.16-24)			本資料 (頁)	補助資料 (pp.16-17)	備考
研究の手立て	(1)時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果 (pp.17-19)	ア我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えやすくなった (p.17)	図5 (p.17)	質問5	「2 研究の手立て」(pp.3-5)の項目立てと対応する
			図6 (p.17)	質問4	
	イ主体的に読む姿勢を養うことができたか (pp.18-19)	図8 (p.18)	質問2		
		図9 (p.19)	質問3		
	(2)比較して論じる活動の効果 (pp.19-21)		図10 (p.21)	質問7	
(3)読み比べ、比較して論じること(手立て(1)・(2))で、我が国の言語文化について自分の考えをもつことができたか (pp.21-22)					学習シート及び振り返りシートの記述を分析する
(4)学習意欲を喚起できたか (pp.22-24)			図11 (p.22)	質問9	図14(質問15)については事後アンケートのみ回答する
			図12 (p.23)	質問10	
			図13 (p.23)	質問11	
			図14 (p.24)	質問15	

4 研究構想図



VI 授業実践と授業の考察

1 授業実践計画

実践校 盛岡第一高等学校

対象学年 第1学年全7クラス1組～7組（1・4組は研究者、2・3組及び5～7組は研究協力者による授業を実施）計288名

実践期間 令和5年9月13日（水）～9月20日（水） 4時間

単元名 歌物語と詩や短歌などを読み比べ、和歌の魅力を考えよう。

『伊勢物語』（桐原書店 探求言語文化）

2 実践構想

（1）単元の目標及び評価規準について

複数のテキストを読み比べ、比較して論じる活動を通して考えを形成するという本研究の目的に沿い、〔思考力、判断力、表現力等〕の目標を、「B 読むこと」の指導事項（1）のオ「作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと」に設定した。本単元では、言語文化の内容を、言語文化の定義に照らし合わせ、和歌とした。次に、〔知識及び技能〕については、和歌の中の言葉が文脈的意味をもつことに気付かせた上で和歌を的確に解釈させたいと考え、指導事項（1）のエ「文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること」に設定した。特に、『伊勢物語』に代表される「歌物語」は、和歌が詠まれた経緯を物語調に叙述したものである。和歌を解釈するには、物語の叙述を根拠として和歌の中の言葉の文脈的意味を把握する必要がある。そのため、生徒が〔知識及び技能〕を習得するのに最適であると考え、『伊勢物語』を中心教材として取り上げた。

以上を踏まえ単元の評価規準は表4のとおり設定した。

表4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。（（1）エ）	①「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。（B（1）オ）	①学習の見通しをもって、和歌がどのような特徴や魅力をもっているかについて複数の文章を読み比べ、比較して論じることを通して、進んで、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもとうとしている。

（2）言語活動について

言語活動について、「B 読むこと」（2）のウ「異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動」を取り上げた。ただし「これらの言語活動は例示であるため、各学校では、これらの全てを行わなければならないものではなく、これ以外の言語活動を取り上げることも考えられる」（「解説」：13）と、柔軟な運用をするように付言されている。したがって、実践における言語活動を「異なる時

代に成立した歌物語と詩や短歌などを読み比べ、比較して論じる活動」とし、(2)のウと関連するものとした。また、本実践は、読み比べ、比較して論じる活動を一単元の中で3回繰り返し、我が国の言語文化について自分の考えを形成しやすくなるように工夫した。

(3) 教材の選定について

比較対象作品は単元の目標を基に、内容や語句の共通点に着目し、表5のような観点から選定した。

表5 比較対象作品と選定した観点について

基となる作品	比較対象作品	観点
『古今和歌集』 「仮名序」	『詩経』 「大序」	<ul style="list-style-type: none"> ・「うた」とは何かについて定義されている点で共通している。
『伊勢物語』 「東下り」	『都落ち』 ヨルシカ	<ul style="list-style-type: none"> ・恋人と別れて都を離れる哀しみをうたっている点で「東下り」と内容が似ている。 ・「都」「鳥」「舟」など、登場する題材が共通している。 ・J-popの歌詞であるため、生徒の興味を引きやすい。 ・実際は『万葉集』の歌を基に書かれており、古歌を踏まえて創作する日本古来の表現の手法を学ぶのにも適している。
『伊勢物語』 「筒井筒」 ※ 「筒井筒」の比較対象は、一班につき一つを選択させる。	『秋浦歌』 李白	<ul style="list-style-type: none"> ・「髪」という言葉が含まれている。 ・漢詩である。 ・五言絶句の形式であり、漢詩としては読みやすい。 ・「筒井筒」とは対照的に、年老いた男性の鬱屈した思いが「髪」という言葉に託されている。
	『みだれ髪』 「その子二十」 与謝野晶子	<ul style="list-style-type: none"> ・「髪」という言葉が含まれている。 ・近代短歌である。 ・成人した女性の「髪」に対する思いが詠まれている点で「筒井筒」と共通している。 ・鏡の前で自らの美しさに魅了される女性の姿が描かれている点で「筒井筒」とは相違している。
	『若菜集』 「初恋」 島崎藤村	<ul style="list-style-type: none"> ・「髪」という言葉が含まれている。 ・近代詩である。 ・「まだあげ初めし」という書き出しが、「髪上げ」を連想させる点で、「比べこし」の歌の一部分と共通している。 ・「筒井筒」とは視点が異なり、男性から見た女性の「髪」が描かれている。

(4) 単元の指導と評価の計画について

(1)～(3)を踏まえ、表6のように設定した。

表6 単元の指導と評価の計画

時	学習内容	評価する内容	評価方法
1	○『古今和歌集』と『詩経』の序文を読み比べ、比較して論じ、単元の見通しをもつ。	[知識・技能] ①	「記述の確認」 学習シート③
2	○『伊勢物語』「東下り」と『都落ち』を読み比べ、比較して論じ、言葉の文脈的意味を理解して解釈する。		
3	○『伊勢物語』「筒井筒」と漢詩や短歌、近代詩などを読み比べ、比較して論じ、作中の和歌の魅力について考えをもつ。	[思考・判断・表現] ①	「記述の確認」 学習シート④
4	○『伊勢物語』と様々な文章を読み比べ、比較して論じた学習を振り返り、和歌の魅力について考えをもつ。	[主体的に学習に取り組む態度] ①	「記述の分析」 振り返りシート

(5) 手立てを具体化する方策について

ア ベン図の使用

本実践では、複数のテキストを読み比べて気付いた共通点や相違点を、ベン図に書き出すことにした(図1左参照)。共通点や相違点を視覚的に把握しやすくなること、また、個人で、班で、全体で考える際に、同じ図を用いることで情報を共有しやすくなるのが利点であると考えたからである。

左は、共通点や相違点を、個人で書き出したベン図(学習シート②)である。

右は、個人で読み比べて気付いたことを基に班で比較して論じ、Google Jamboard(以下Jamboardという)にまとめたベン図である(ともに第1時のもの)。

図1 ベン図の例

イ Jamboardの使用

個人で読み比べて気付いたことを班で比較して論じる際に、Jamboardの付箋機能を使用した(図1右参照)。Jamboardでは、班の意見を一枚のホワイトボードに整理したり、他

の班のホワイトボードを自由に参照したりできる。これによって、班の意見をまとめたり、他の班と情報を共有したりしやすくなるのが利点であると考えたからである。

ウ 班の構成

全員が話し合いに積極的に参加し、意見を共有しやすくするために、一班は3人で構成した。また、端末は一班で1台使用することとした。



写真は、3人で端末の画面（Jamboardのペン図）を見ながら、話し合っている様子である（第1時のもの）。

記録者は固定化しないよう、時間ごとに交代するように指示した。

図2 班で比較して論じる様子

3 各単位時間の授業の実際

授業で使用した「学習シート」（①～④）及び「解釈補助シート」（①・②）並びに「振り返りシート」については、別添補助資料に掲載する。

(1) 第1時

ア 本時の目標

『古今和歌集』と『詩経』の序文を読み比べ、「うた」とはどのようなものだと言われているかを比較して論じ、学習の見通しをもつ。

イ 展開

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○「うた」とは何かについて確認する。 ○なぜ人は「うた」に心を引かれるのか。これまでの経験や知識を振り返って学習シート①に記述し、共有する。 ○本時の学習課題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「うた」が様々な漢字で表記されることに気付かせる。 ・生徒自身の知識や経験から、日常生活における「うた」の働きや魅力を学習シート①に書き出して共有させ、学習の動機付けをする。
<p>【学習課題】 昔の人は、「うた」とはどのようなものであると言っているか、二つの文章を比べて読み取ろう。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ○『古今和歌集』と『詩経』の序文の一部を読み比べ、内容の共通点や相違点を考 	<ul style="list-style-type: none"> ・二つの作品を読み比べ、内容の共通点や相違点について学習シート②に個人で記

<p>え、共有する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">手立て：読み比べる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">手立て：比較して論じる</div>	<p>述するよう指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動は班で行うこととし、一班3人でタブレット1台を使用することとする。 内容の共通点や相違点を学習シート②に個人で書き出した後、Jamboardを用いて班で比較して論じ、共有させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">【まとめ】「うた」とは人の心が言葉となって表れたものであると言っている。</div>	
<p>○単元の学習課題を確認し、学習の見通しをもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 異なる時代に成立した文章を読み比べ、比較して論じることで、時代を超えた内容や考え、表現の共通点や相違点に気付くことができるようになることに着目させる。 本單元では「うた」のなかでも和歌の魅力に焦点をあてて考えていくことを示す。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">【単元課題】なぜ和歌は人の心を引きつけるのか、様々な文章を比較しながら考えをもとう。</div>	
<p>○次回から『伊勢物語』を学習することを確認する。</p> <p>○『伊勢物語』が成立した時代やジャンルを確認する。</p> <p>○学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 和歌の魅力について考えるために、『伊勢物語』と様々な韻文（歌詞や詩など）を読み比べることを示す。 「成立した時代」「ジャンル」「主人公」について確認する。 本時の学び方について振り返りシートに記述するよう促す。

(2) 第2時

ア 本時の目標

『伊勢物語』「東下り」と『都落ち』（J-pop）の歌詞の内容を読み比べ、比較して論じ、両者に共通して用いられている言葉には文脈的意味があることを理解し、和歌を解釈する。

イ 展開

学習活動	指導上の留意点
<p>○本時の学習課題を確認する。</p>	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">【学習課題】「名にし負はば…」の和歌を的確に解釈しよう。</div>	
<p>○「東下り」第4段落を斉読し、その後、班で一文ずつ音読する。比較の対象となるJ-popを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 漢字の読みや区切り方など、音読しにくい箇所があれば、質問するよう促す。

<p>○「東下り」第4段落と、『都落ち』（J-pop）の歌詞を読み比べ、内容の共通点や相違点を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・二つの作品を読み比べ、内容の共通点や相違点について、学習シート③に個人で記述するよう指示する。なお、解釈する際は、辞書や文法書を用いて調べたり、解釈補助シート①を参考にしたりしてよいことを伝える。（図3参照） ・個人で読み取った内容の共通点や相違点をJamboardを用いて班で比較して論じ、共有させる。 ・班で比較して論じ、共有した内容について、数班を指し、記録者が発表するよう促す。 ・両者に共通する「鳥（都鳥・海猫）」が何を表しているか、班で比較して論じ、考えを共有させる。 ・「都鳥」が表すものを踏まえて和歌を解釈させ、確認する。
<p>手立て：読み比べる</p>	
<p>手立て：比較して論じる</p>	
<p>○両者に共通する言葉が何を表しているか、班で確認する。</p>	
<p>手立て：比較して論じる</p>	
<p>○「都鳥」が表すものを踏まえ和歌を解釈する。</p>	
<p>【まとめ】「都」という名をもっているなら、都鳥よ、さあおまえに尋ねよう。私の愛する人は無事に都で暮らしているかどうかと。</p>	
<p>○学習を振り返る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学び方について振り返りシートに記述するよう促す。
<p>○次の時間の内容を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次の時間は「髪」が表すものについて考えることを予告する。



写真は、個人で読み比べる際、文法解説書やスマートフォンなど、様々な媒体を使って調べ、内容を読み取ったり、共通点や相違点を探したりしている様子である。

図3 個人で読み比べている様子

ウ 評価について

【知識・技能】①の「文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している」状況を、「『和歌』の解釈は、文脈の中で形成されることを理解している」姿（「おおむね満足できる」状況（B））と捉え、第1次（第1時・第2時）に評価した。

本実践では、「東下り」と『都落ち』を読み比べ、内容の共通点や相違点及び「鳥」が表

す文脈的意味について比較して論じる活動を通して、和歌中の言葉に表れた主人公の状況や思いを前後の叙述からの確に読み取り、解釈できるようにした。

例えば、「都に置いてきた恋人が心配で、都という名を冠する都鳥に恋人の安否を教えて欲しいと思っている」や「都という名をもっているなら、都にいる恋人は無事であるかどうかを聞こう」など、和歌中の「都鳥」が表すものを的確に把握し、都に残してきた恋しい人の安否を主人公（作者）が都鳥に尋ねている歌であることに言及できている生徒については、評価規準を満たしていると判断し、「おおむね満足できる」状況（B）とした。

一方、「『都』という名を持っているならば、相手を心配する気持ちとなり、無事であるかどうかを問う」のように、主人公と「相手」の関係を文脈からの確に読み取り表現できていないものは「努力を要する」状況（C）とした。Cと評価した生徒に対しては、Bを実現するための具体的な手立てとして、まずは的確な現代語訳をした後に、言葉の文脈的意味や歌の背景、登場人物の人間関係などを踏まえて解釈するよう助言した。

また、「いざ言問はん」の訳が抜けていることや、説明的な文末になっていることなどの課題が全体的に見られた。そのため、次の時間の始めには、解釈とは現代語訳をベースにしてそこに文脈的意味を補うことであると説明した。

（3）第3時

ア 本時の目標

『伊勢物語』「筒井筒」と、漢詩や近代短歌、近代詩など多様な文章を読み比べ、比較して論じ、「筒井筒」中の和歌の魅力について本文の叙述を根拠に捉えることができる。

イ 展開

学習活動	指導上の留意点
○本時の学習課題を確認する。	
【学習課題】 「比べこし…」の和歌がなぜ男の心を引きつけたのか捉えよう。	
○「筒井筒」の第1段落を斉読し、その後班ごとに一文ずつ音読する。比較対象として、「髪」について描かれた韻文を選択する。 ○「筒井筒」の前半と、各班で選択した韻文を読み比べ、内容の共通点や相違点を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0; text-align: center;">手立て：読み比べる</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0; text-align: center;">手立て：比較して論じる</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の読みや区切り方など、音読しにくい箇所があれば、質問するよう促す。比較対象とする韻文（漢詩や近代短歌、近代詩など）を班で一つ選択させる。 ・二つの作品を読み比べ、内容の共通点や相違点について、学習シート④に個人で記述するよう指示する。なお、「筒井筒」を解釈する際は、辞書や文法書を用いて調べたり、解釈補助シート②を参考にしたりしてよいことを伝える。 ・個人で読み取った内容の共通点や相違点をJamboardを用いて班で比較して論じ、共有させる。 ・「髪」という言葉が何を表しているか、
○両者に共通する言葉が何を表しているか	

<p>考える。</p> <p>○「髪」が表すものを踏まえ和歌を解釈する。</p> <p>○和歌がなぜ男の心を引きつけたのか、考えたことを学習シートに記述する。</p>	<p>班で比較して論じ、考えを共有させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「比べこし…」の和歌において、「髪」に託された女の思いを考え、和歌を解釈させる。 ・学習を振り返り、「比べこし…」の歌がなぜ男に感動を与えたのか本文を根拠に考えて記述するよう促す。
<p>【まとめ】 自己の成長を背丈に喩えた男の歌に対し、髪の長さに喩えて応じ、男と結婚したい思いを歌に託して強く伝えた女の返歌の巧みさと情熱に感動したから。</p>	
<p>○学習を振り返る。</p> <p>○次の時間の内容を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学び方について振り返りシートに記述するよう促す。 ・次の時間は、比較して論じた内容について班ごとに説明することを予告する。

ウ 評価について

【思考・判断・表現】①の「『読むこと』において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている」状況を、「本文のあらすじや本文中の和歌の解釈を踏まえ、和歌の言葉や表現には詠み手の思いが込められていることについて考えている」姿（「おおむね満足できる」状況（B））と捉え、第2次（第3時）に評価した。

本実践では、「筒井筒」と生徒が選択した「髪」という言葉を含む作品を読み比べ、内容の共通点や相違点及び「髪」が表す文脈的意味について比較して論じる言語活動を通して、男が結婚を決意した理由を、女の和歌の言葉や表現からの確に捉えることができるようにした。

例えば、「女が自分との結婚を望み、待ち遠しく思ってくれていると気付いたから」や「相手も自分の気持ちと同じで、結婚したいと思っていることが分かったから」など、男が女との結婚を決めた理由は、女の強い思いが和歌の言葉や表現に込められていたからだと考えられている生徒については、評価規準を満たしていると判断し、「おおむね満足できる」状況（B）とした。

一方、「この歌を聞いて、お互いの成長を感じたから」や「長い間過ごしてきた思い出がよみがえってきたから」など、男が結婚を決意した理由を、本文や歌の内容の解釈を根拠として考えられていない生徒については「努力を要する」状況（C）とした。Cと評価した生徒に対しては、Bを実現するための具体的な手立てとして、まずは女の歌の解釈を的確に踏まえ、その上で男が女と結婚しようと思った理由について考えるよう助言した。

また、女の歌の表現が男の歌の表現を踏まえた返歌であることに気付いていない課題が全体的に見られた。そのため、次の時間の始めには、男女の歌のやり取りに関わる文化や、和歌の返歌の特徴（先に詠まれた歌の内容や表現を踏まえること）について説明した。

(4) 第4時

ア 本時の目標

様々な「うた」の中でも、特に和歌にはどのような特徴や魅力があるか。単元全体の学習を振り返って説明することができる。

イ 展開

学習活動	指導上の留意点
○本時の学習課題を確認する。	
【学習課題】 なぜ和歌は人の心を引きつけるのか、自分の考えをもとう。	
○「筒井筒」と韻文を読み比べ、比較して論じたことを踏まえ、「髪」という言葉には主人公（作者）のどのような思いが表れているかについて発表する。（図4参照）	・ 前回の授業でつくったJamboardを再度発表に向けて確認するよう指示する。発表の際には、選択した作品の内容も説明するよう指示する。同じ作品に取り組んだ他の班のJamboardを見たり、直接赴いたりして確認してよいことを伝える。
手立て：比較して論じる	
○単元の学習を踏まえ、なぜ和歌は人の心を引きつけるのかについて、考えを記述する。記述した考えを班で読み合い、共有する。	・ 単元の学習を踏まえ、和歌の魅力について、学習シート①に記述させる。 ・ 記述した考えを班で読み合い、共有させる。
手立て：比較して論じる	
【まとめ】 和歌には、三十一文字という短い言葉のなかに、主人公や作者が思ったことを凝縮させて訴える特徴があった。 和歌と読み比べた歌詞や詩も、それぞれ短い言葉に思いが込められており、感動を誘われたが、より短い和歌のほうが、言葉に込められた思いへの想像を掻き立てられるように感じた。 このようなことから、和歌が人の心を引きつけ、時代を超えて読み継がれているのだと考えた。	
○学習を振り返る	・ 単元の学び方について振り返りシートに記述するよう促す。



写真は、班で話し合っ
てまとめたJamboardを黒板に
投影し、発表している
様子である。

図4 話し合ったことを発表する生徒の様子

ウ 評価について

〔主体的に学習に取り組む態度〕①の「学習の見通しをもって、和歌がどのような特徴や魅力をもっているかについて複数の文章を読み比べ、比較して論じることを通して、進んで、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもとうとしている」状況について、「伊勢物語と様々な文章を読み比べ、比較して論じることを通して、我が国の言語文化である和歌の特徴や魅力について考えを広げ、深めようとしている」姿（「おおむね満足できる」状況（B））と捉え、第3次（第4時）に評価した。

本実践では、毎時、学習活動を振り返り、成果と課題について記述させた。また、単元の終わりには、時間ごとの成果と課題を踏まえ、単元の学習活動について振り返り、記述させた。これにより次の単元に向けての学習の見通しをもつよう促した。

例えば、「古文や和歌は内容が分かって今までは感情までは分かっていなかったが、今回の単元で複数の文章を比べることで、表現の特徴や感情まで読み取ることができた。〔中略〕古文だけでなく現代の歌などと比べてみても意外と感じることは似ているといった新しい発見ができて良かった」（下線筆者）という振り返りシートの記述から、読み比べ、比較して論じる言語活動を通して我が国の言語文化について自分の考えを形成していることが読み取れる。このことから、評価規準を満たしていると判断し、「おおむね満足できる」状況（B）と評価した。

一方で、和歌の魅力や特徴について述べているだけで、どのように学んだことで、その魅力や特徴に気付くことができたのかについて、記述では分からないものは、「努力を要する」状況（C）と判断した。Cと評価した生徒に対しては、学び方をどのように工夫したかや、それによって自らの考えがどのように深まったかなど自分の学習に対する振り返りを行うよう助言した。

ただし、振り返りシートに記述すべきこと（視点）を、授業の中で生徒と十分に共有できていたかについて課題が残る。単元の見通しや学習のすすめ方、振り返りの仕方などについて、最初に生徒と共有しておくことが大切であった。また、単元の学習における生徒の変容を適切に評価できたかについても課題が残る。〔主体的に学習に取り組む態度〕の評価の方法について再考が必要である。

4 授業実践の検証

時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果並びに比較して論じる活動の効果、及びそれらの言語活動を通して、生徒が我が国の言語文化について自分の考えをもつことができたかについて検証する。さらに、授業実践を通して学んだことを社会や自分との関わりの中で生かす態度を

養い、学習意欲を向上させることができたかについて検証する。

なお、生徒を対象としたアンケート調査について、授業実践の前後で指標間に有意な差があるかを確かめるため、 χ^2 検定を行った。

** p < .01で有意差あり * p < .05で有意差あり ns 有意ではない

(1) 時代の異なる複数のテキストを読み比べる活動の効果

時代の異なる複数のテキストを読み比べることで、我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えやすくなったか及び主体的に読む姿勢を養うことができたかについて検証する。

ア 我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えやすくなったか

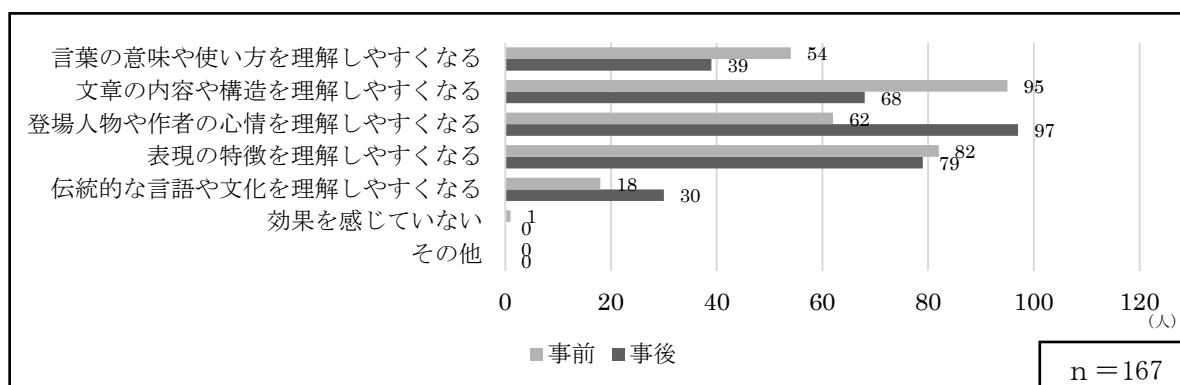


図5 「『言語文化』の授業で複数の文章を比較することにはどのような効果があると思いますか（2つ以内）」に対する回答結果

図5について、項目は上から順に「B 読むこと」の学習過程に沿って並べた。「言葉の意味や使い方」や「文章の内容や構造」よりも、「登場人物や作者の心情」や「伝統的な言語や文化」を理解するのに効果的だという回答が増加した。このことから、生徒は複数のテキストを読み比べ、共通点や相違点を探しながら、内容の把握や解釈の深化にとどまらず、我が国の言語文化の一貫性や変化の過程を捉えていたと考えられる。

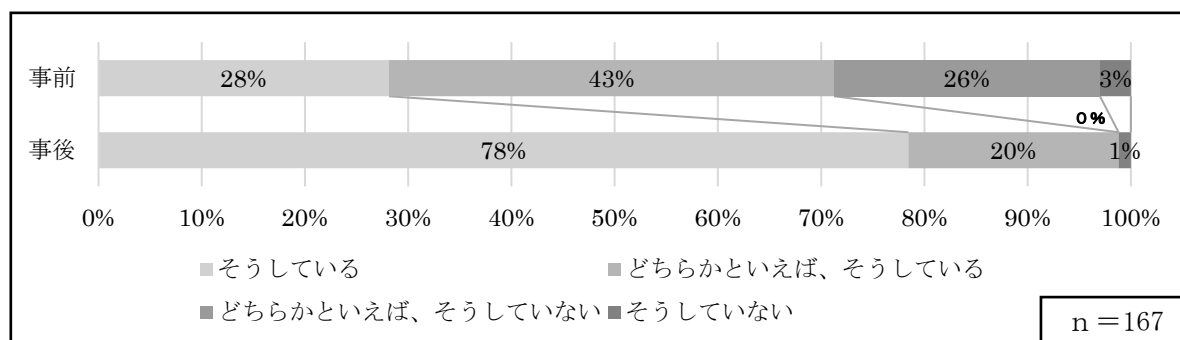


図6 「『言語文化』の授業では、複数の文章を比較して得られた情報を関連付けたり、整理したりしていますか」に対する回答結果 ** (χ^2 値=47.63)

図6について、肯定的な回答が有意に増加した。生徒は、複数のテキストを読み比べる活動を通して、情報を関連付けたり、整理した実感を強くもつことができた。このことから、読み比べる活動を普段の授業において継続して行うことで、情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を涵養できるものと考えられる。

イ 主体的に読む姿勢を養うことができたか

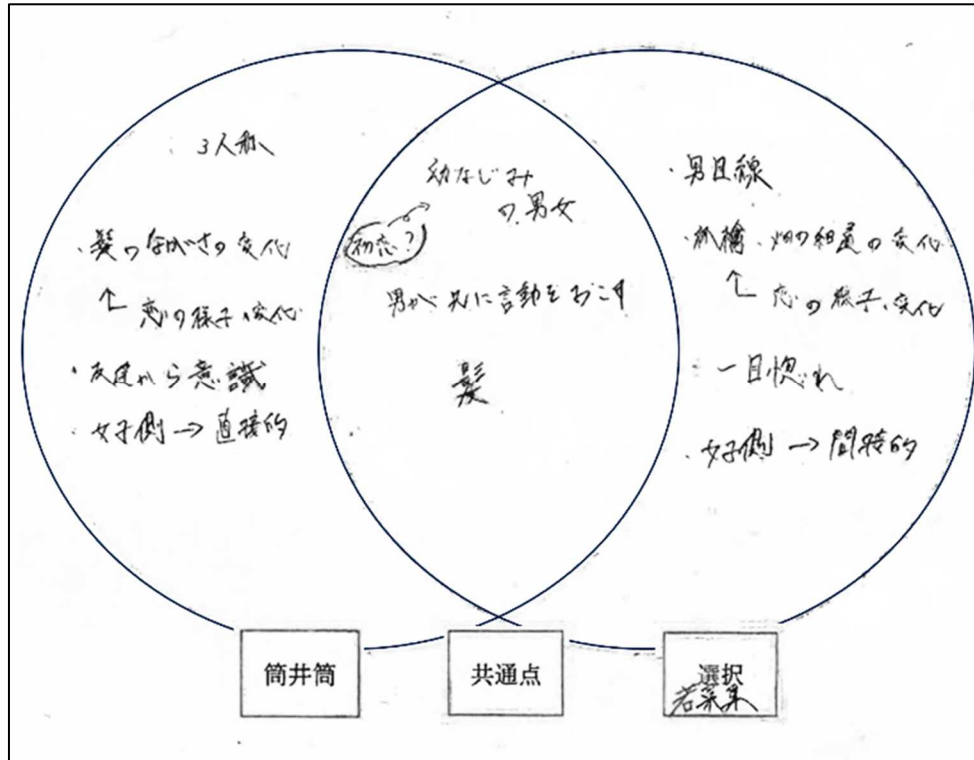


図7 生徒S1のベン図(学習シート④)

図7は、生徒S1が、第3時で「筒井筒」と『若菜集』「初恋」を読み比べて気付いた共通点や相違点を書き込んだベン図(学習シート④)である。これを見ると、語句の意味や文法事項などを主体的に調べ、内容と構造を把握したうえで、登場人物の行動や人間関係、表現の特徴へと考えを深めていった様子がうかがえる。

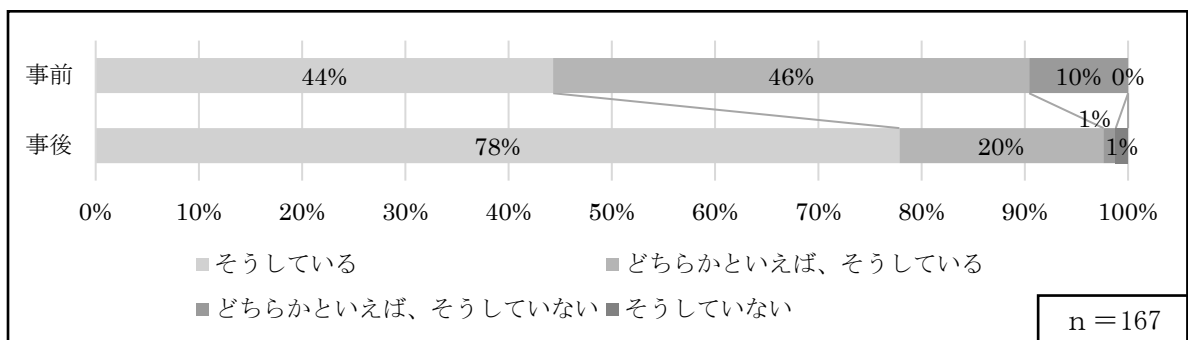


図8 「『言語文化』の授業では、内容を理解するためや、構成や展開を把握するためなど、読む目的を理解して読んでいますか」に対する回答結果 * (χ^2 値=6.435)

図8について、肯定的な回答が有意に増加した。このことから、生徒は複数のテキストを読み比べる活動を通して、共通点や相違点に気付くために思考を働かせながら、文章を主体的に読み進めていったことが分かる。

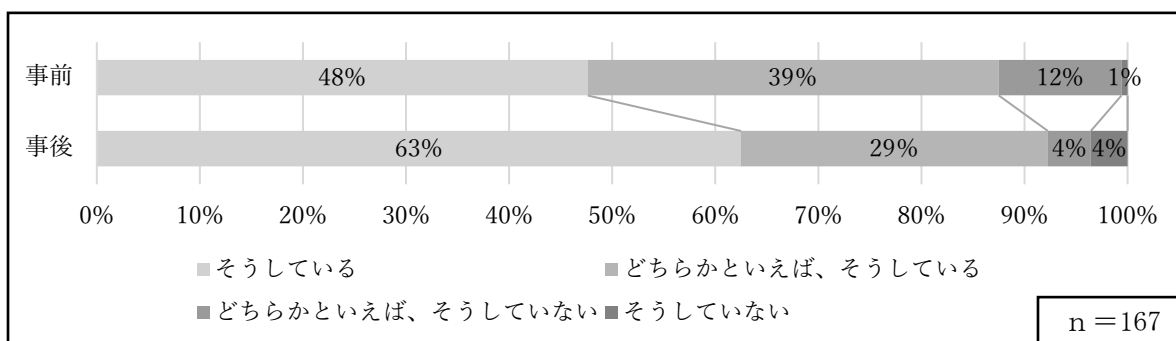


図9 「『言語文化』の授業では、読んでいて分からない言葉の意味や文法事項などを自分で調べるようにしていますか」に対する回答結果 ns (χ^2 値=1.605)

図9について、事前でも肯定的な回答が多く、有意差はないが、「そうしている」と積極的に肯定する回答が増加した。このことから、複数のテキストを読み比べる活動を行った本実践においても、従来の授業と同じかそれ以上に、生徒は読んでいて分からない語句の意味や文法事項を積極的に調べ、解釈に生かそうとしていたことが分かる。

表7 「『言語文化』の授業では、読んでいて分からない言葉の意味や文法事項などを自分で調べるようにしていますか」のクロス集計 (n=167)

事後 \ 事前	そうした	どちらかといえば、そうした	どちらかといえば、そうしなかった	そうしなかった
そうしている	65人	12人	2人	1人
どちらかといえば、そうしている	33人	31人	2人	0人
どちらかといえば、そうしていない	7人	6人	3人	4人
そうしていない	0人	0人	0人	1人

表7は、図9における生徒の回答の変化をクロス集計したものである。否定的な回答から肯定的な回答に変化した生徒（網掛けなし）は、27.5%であった。肯定的な回答から変化していない生徒（横縞）は57.5%であった。否定的な回答から変化していない生徒（縦縞）は2.4%であった。

一方、肯定的な回答から否定的な回答に変化した生徒（右下がり斜線）は12.6%であった。しかし、それらの生徒の授業に対する感想を見ると、「現代と昔の詩の共通点を見つけることがおもしろかった」や「和歌の良さとか2つの文の共通点を積極的に探すことができたし、授業を受ける前と受けたあとで、思っていた事が変わったので良かった」など、肯定的な記述がほぼすべての回答に見られた（20人/21人、1名は授業に不参加）。このことから、否定的な回答に変化した生徒の中には、語句の意味や文法事項よりも、表現の特徴や作品の背景などに興味をもって調べていた者が一定数いたと推測される。

(2) 比較して論じる活動の効果

読み比べて気付いた共通点や相違点について、比較して論じる活動の効果を検証する。

表8は、生徒S1（図7参照）が所属する班が、「筒井筒」と『若菜集』「初恋」を読み比べた後、生徒S2・S3と比較して論じた様子を文字に起こしたものである。読み比べた情

報を共有しながら、反語表現への気づきを契機として、登場人物の性格について考えを広げていることが分かる。

表8 話し合いの例

生徒S1	生徒S2	生徒S3 (記録者)
<p>① いやちょっとさあ、え、いや、これさあ、これどういう意味なの？</p> <p>③ 誰か…「誰か上ぐべき」、よし、あ、君以外の誰が上げてくれるんですか？</p> <p>⑥ いや…？反、反語？</p> <p>⑦ 反語！反語！</p> <p>⑨ 反語だあ！すげー。</p> <p>⑬ なるほど。</p> <p>⑮ 「君ならず…」うわ、ちょっと国語できた気分。</p> <p>⑰ いいんじゃない？共通点「エモい」でいいんじゃない。あ、あれじゃない、最後の句がさあ、直接的かさあ、ちょっと遠まわしかがさあ、違うんじゃない。</p> <p>⑲ 遠まわしだよ。</p> <p>⑳ そうそう、わかっているのに、聞くのが…。</p> <p>㉑ すげー。</p> <p>㉓ (「筒井筒」は)女子側からが、直接的だよねっていう。</p> <p>㉔ 確かに。</p> <p>㉕ 恋っていいね。</p>	<p>② え、マジでさあストレート過ぎない？</p> <p>④ そうそうそう…</p> <p>⑧ 反語！反語！</p> <p>⑩ え、どこに反語のなんか…「か」？</p> <p>⑫ 「上ぐべき…か、いや、何とかない」みたいな。</p> <p>⑭ 「君以外…ない」みたいな？</p> <p>⑱ こっち (『若菜集』) 結構遠まわし気味じゃない？</p> <p>㉒ この道誰がつくったんだろうね、あなたが毎日来てくれるからだよねって。</p> <p>㉔ おおー。</p> <p>㉕ わかった。え、こっち (『若菜集』) の女の子はちょっと恥ずかしがり屋なんだよ。</p> <p>㉖ こっち (『若菜集』) はシャイ、シャイガールだ。シャイガールと、ストレートガール。</p> <p>㉗ おー面白くなってきた。</p>	<p>⑤ いや、あなたしかいない。</p> <p>⑪ 「上ぐべき」だからあ、「誰か上げてくれるのかな、いや…」</p> <p>⑫ これ (「筒井筒」) むちゃくちゃエモエモじゃん。ちょっと直接的すぎるんじゃない。</p> <p>㉘ よし、オッケー。</p>

生徒S1が読み比べた際 (図7参照) には、「筒井筒」中の女性の働きかけが直接的であると読み取れる背後には反語表現があることや、登場する女性の人物像が対照的であることま

では触れられていなかった。このことから、生徒S1は比較して論じる活動を通してそれらに気付いていったことが分かる。

次に、表9は、生徒S1が単元の学習を振り返って書いたものである。比較して論じる言語活動を通して、他者との関わりの中で情報を共有し、考えを深めていたことが分かる。

表9 記述例（生徒（S1）の振り返り）

・自分自身、和歌をはじめとした古文を読むのが苦手で、嫌いだった。しかし、今回の4時間で、様々な和歌を読んでいくうちに、しだいに読解ができるようになり、読むのが楽しくなっていったのは成長かなと思った。また、その過程の中で自分の古文についての知識があまりにもなさすぎるということを痛感させられた。これを受けてもっと古文の学習に励まなければいけないと思った。また、普段ならば1人で読んで読解ということがほとんどであるが、今回のようにグループでやることもいいなと感じた。グループ内で話し合って情報を共有したり、他のグループから情報をもらって考えを深めたりという過程こそが重要なかなと感じた。（下線筆者）

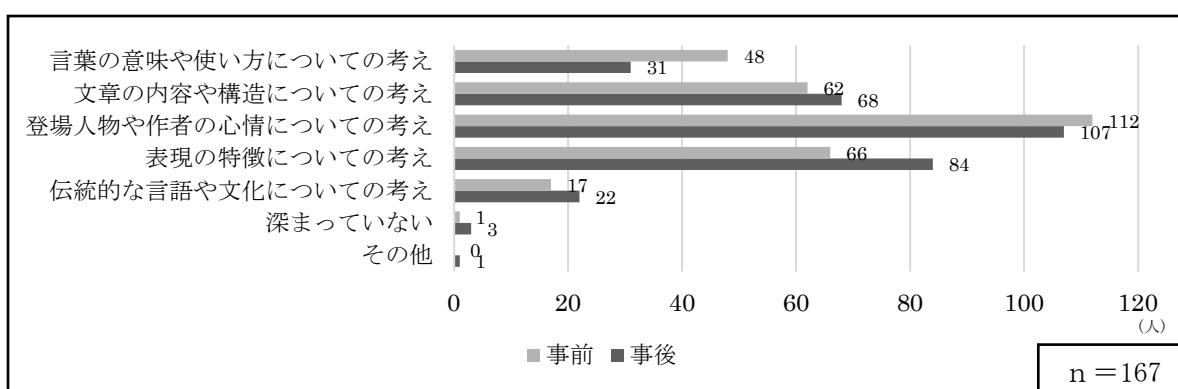


図10 「『言語文化』の授業のなかで話し合うことで、どのような考えを広げたり、深めたりしていますか。該当するものを選んでください（2つ以内）」に対する回答結果

図10について、項目は上から順に「B 読むこと」の学習過程に沿って並べた。ほとんどの生徒が、比較して論じることを通して考えを広げたり、深めたりすることができたと回答している。実践では、『伊勢物語』を主教材として扱ったため、「内容や構造についての考え」という回答が増加している。また、和歌について比較して論じることが中心であったため、表現の特徴について考えが深まったという回答が増加している。さらに、人数は前後とも他の項目と比べ少なかったものの、「伝統的な言語や文化についての考え」という回答も増加した。生徒は、比較して論じる活動を通して、内容や構造及び表現の特徴を理解し、我が国の言語文化について自分の考えを形成していったといえる。

(3) 我が国の言語文化について自分の考えをもつことができたか

時代の異なる文章を読み比べ、比較して論じた本実践における言語活動が、我が国の言語文化について自分の考えをもつことに効果的に働いたかについて検証する。

第3時の学習シート④で、[思考・判断・表現]①について評価基準を満たしていると判断し、「満足できる」状況（A）または「おおむね満足できる」状況（B）であると評価した生徒は93.1%であった（p.14ウ参照）。

また、第4時に「和歌が人の心を引きつけるのはなぜか」という単元の課題について生徒の記述（学習シート①下段）を分析した。多くの生徒が、短い言葉に作者の思いが凝縮されて

いることや、間接的な表現によって伝える奥ゆかしさがあることなど、日本独自の言語文化である和歌の表現の特徴に着目して書いていた。「短い言葉や限られた字数に作者の思いを込めていること」に着目して書いた生徒は46.6%、「作者の思いを言葉に託して間接（象徴・比喩）的に表現していること」に着目して書いた生徒は29.8%いた。その他、「時代を超えて共感できること」や「歌が詠まれた時代背景を想像できること」などを魅力としてあげた生徒も多くいた。

さらに、振り返りシートの記述を分析すると、73.2%の生徒が、我が国の言語文化の時代を超えたつながりについて考えをもったことが読み取れた。表10はその事例である。

表10 記述例（単元の振り返り）

<p>生徒A：この単元を通して、日本の文化である和歌の価値を再発見した。いくつかの時代も形式も異なる歌を比較し、表現を学んだり、何を象徴しているのか何を伝えたいか考察する時間は、グループの人と色々なアイデアを交流できて楽しかったし、想像をふくらませるのも楽しかった。<u>現代人は「好き」「良い」と簡単に言葉を発するけど、昔の人はあんなに表現を工夫して間接的に感情を伝えていたと思うと、とてもロマンチックで美しいなと思います。和歌の魅力をもっと見つけて昔の人のようにことばを大切にしたい。</u>（下線筆者）</p>
<p>生徒B：昔の詩を読んだり、他のものと比較したことを通して、それぞれの雰囲気や登場人物など違えども、理想としているものや伝えようとしていることは変わらないと思った。<u>「恋」と一言にまとめても、その詩を読んだ人たちの気持ちは、始めこそ違うものでも、同じ方向に向かっていっているなど感じた。それはきっと現代にもいえる事で、J-popやボーカロイド曲など、今に作られた曲も伝えたいことのその真髄は表現は違っても、意味が同じであると思った。歌以外の芸術にも触れてみようと思えた。</u>（下線筆者）</p>

生徒Aは和歌の価値について、生徒Bはうたの特徴について記述している。前者は和歌とその他の作品の相違点について論じ、後者は昔と現代の共通点について論じている。このことから、時代の異なる漢詩や近代詩、J-popの歌詞などと読み比べ、比較して論じることで、和歌という我が国の言語文化について自分の考えをもつことができたといえる。

（4）学習意欲を喚起できたか

「言語文化」において、言語活動を中心とした授業を行うことで、我が国の言語文化への理解を深め、学んだことを社会や自分との関わりの中で生かす態度をもち、学習意欲を向上させることができたかについて検証する。

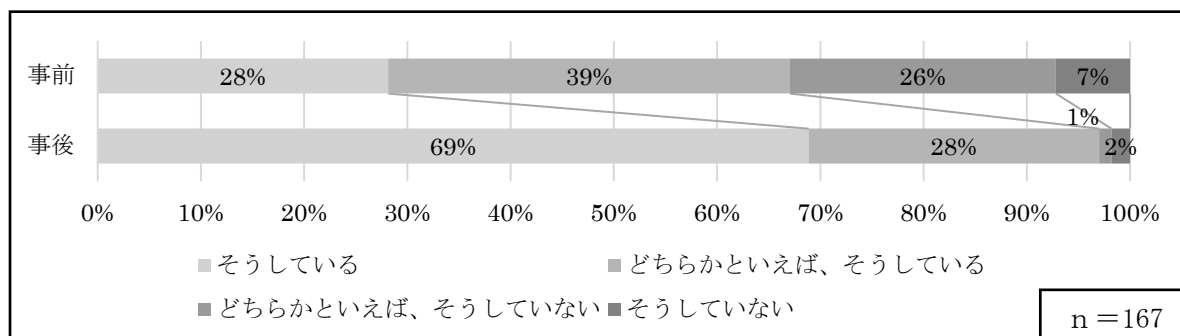


図11 「『言語文化』の授業で学んだことを、他の文章を読んだり、他の物事について考えたりするときに活かしていますか」に対する回答結果 ** (χ^2 値=48.779)

図11について、肯定的な回答が有意に増加した。このことから、生徒は、内容の理解や解釈

の深化にとどまらず、他の物事にも応用可能な広い考えを獲得した実感をもったことが分かる。このことから、本実践において、p.1でふれた「答申」が求める「日本人として大切にしてきた我が国の言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていく」（「答申」：127）観点をもたせることができたと考えられる。

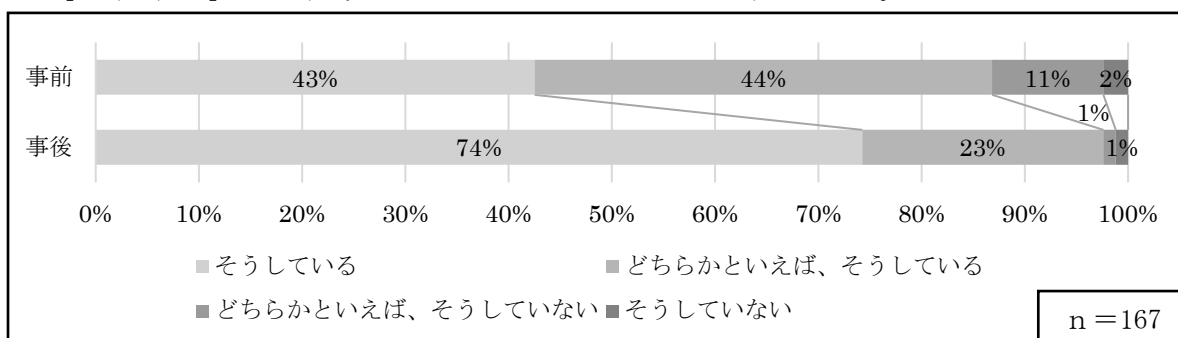


図12 「『言語文化』の授業に興味をもって取り組んでいますか」に対する回答結果

** (χ^2 値=12.054)

図12について、肯定的な回答が有意に増加した。このことから、我が国の言語文化について、読み比べ、比較して論じる今回の授業が、学習意欲を向上させることにつながったと考えられる。

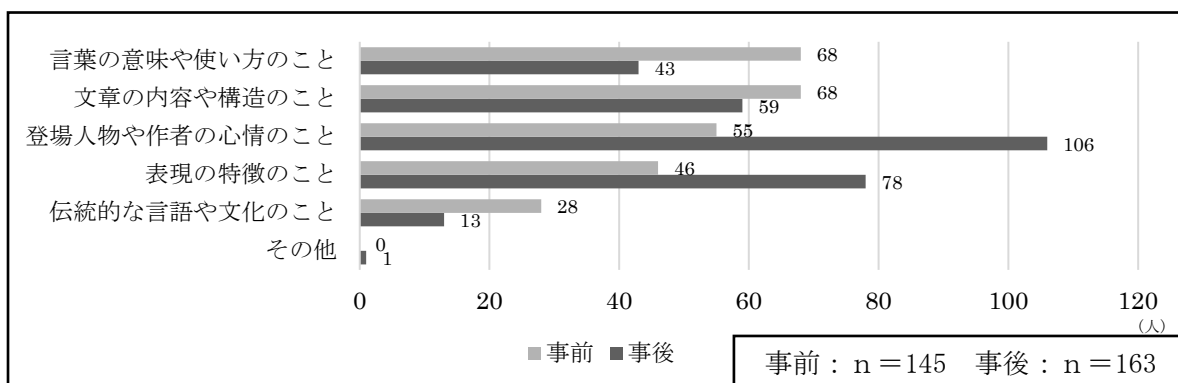


図13 「『言語文化』の授業ではどのようなことに興味をもって取り組んでいますか（2つ以内）」に対する回答結果

図13は、図12で肯定的な回答をした生徒の結果である。項目は上から順に「B 読むこと」の学習過程に沿って並べた。「言葉の意味や使い方のこと」と「文章の内容や構造のこと」という回答が減少した一方、「登場人物や作者の心情のこと」と「表現の特徴のこと」という回答が増加した。語句の意味や文法事項をつぶさに把握し、本文の内容を理解することを中心とした古典の授業から、登場人物や作者の心情、表現の特徴について考える授業へ転換する一例を示すことができたと考えている。

ただし、「伝統的な言語や文化のこと」という回答は減少した。背景として、実践で『伊勢物語』や和歌を扱い、登場人物の関係や心情及び和歌の表現の特徴などについて学習したことがあると考えられる。また、アンケートは該当する2つまでを選択することになっていたため、「伝統的な言語や文化のこと」を積極的に選択するには至らなかったことも考えられる。今後は、我が国の言語文化について学んだ実感を生徒にどのようにもたせるかが課題である。

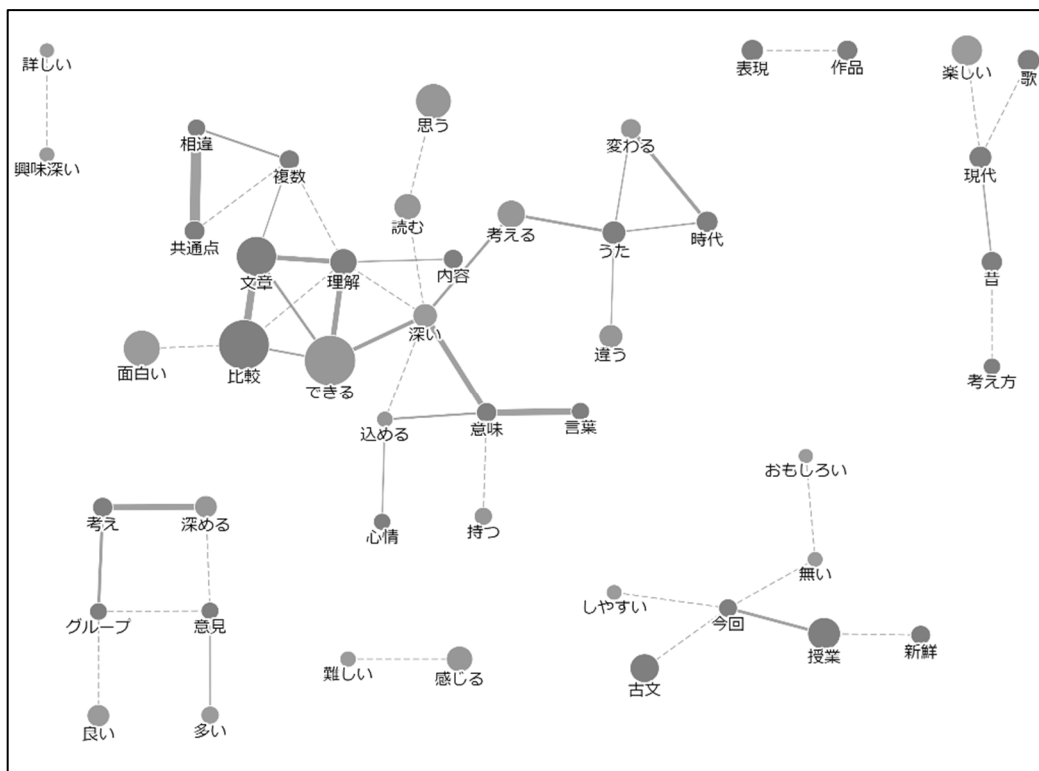


図14 「今回の授業の感想を記述してください」に対する回答結果

ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>)

図14は、生徒の感想について、句読点で句切られた語句の中に共に出現（共起）することが多い単語同士を配列し、線で結んだ図である。線が太いほど共起する程度が強いことを示している。また、丸の大きさは、単語の出現数を表している。

図14左上から中ほどを見ると、「共通点、相違、文章、比較、理解、できる、深い、意味、言葉」が共起の程度が強いことが分かる。実際には「2つのうたを比較することで、時代による相違点やどの時代でも変わらない共通点などが分かって面白かった」や「古文を比較しながら読むことは中学の時からやっていたけど、今回のほうが時代による表現の違いや、言葉の意味、考え方など、より深くまで文章を比較でき、古文の面白みを改めて理解できた」などの感想があった。また、左下を見ると、「考え、深める、グループ」が共起の程度が強いことが分かる。実際には「グループ活動をすることで、新しい考え方が得られるだけでなく、自分の考えを深めることもできた」や「グループで自分とは違った見方をしている人と意見を交流してより古文の意味を深く考えることができた」などの感想があった。このことから、生徒は時代の異なる複数のテキストを読み比べ、比較して論じる言語活動を通して、古典から近現代に受け継がれる歌の魅力に興味を引かれたことが分かった。

(5) 有意差が顕著に出た質問について

有意差が顕著に出た図6（質問4）・図11（質問9）・図12（質問10）について、研究者と研究協力者間で回答に有意差があるかを、直接確率計算を用いて検定した。図6はns（ $p = 0.4935$ ）、図11はns（ $p = 0.6259$ ）、図12はns（ $p = 1.0000$ ）となり、いずれも有意差はない（ns）という結果となった。このことから、「読み比べ、比較して論じる」言語活動について、本研究で検証した効果には、指導者による顕著な差はなかったことが分かった。

VII 研究のまとめ

1 全体考察

本研究は、従来の高校古典教育の課題を踏まえ、「言語文化」において、古典から近現代までの多様な文章を一体的に扱い、読み比べ、比較して論じる言語活動を通して、我が国の言語文化について自分の考えを形成し、理解を深め、学習意欲を喚起する授業を構想・実践した。

従来、高校古典では、教師が主導して知識・技能を習得させた上で、内容を正確に読み取っていく「講義調の伝達型授業」が連綿と行われてきた。そのため、教師の説明を極力省き、言語活動中心の授業に転換することには不安が伴う。しかし、本研究の分析から、言語活動中心の授業においても、生徒はおおむね正確に本文内容を理解し、単元や単位時間の課題について考えを広げられていたことが分かった。これは、生徒が複数のテキストを読み比べ、共通点や相違点を見つけているという目的を明確にもち、語句の意味や文法事項などの基礎的な事柄や、作品の背景や表現の仕方などの発展的な事柄について、自ら調べ、読み進んだためだと考えられる。さらに、本文の内容や言葉の文脈的意味について比較して論じる活動を通して、他者との差異に気付き、相互に誤りを修正したり、足りない部分を補ったりしながら、我が国の言語文化について学びを深めていったためだと考えられる。

また、教員対象のアンケート調査（補助資料参照）では、「時間が足りない」という回答が大変多かった。背景には、「言語文化」の限られた単位数の中で、古典から現代文まで幅広く学ぶ時間を十分に確保できないことがある。まして言語活動を行う時間的な余裕はないというのが実情だろう。そこで、本研究では、本文内容を読み取った上で言語活動を行うのではなく、言語活動を通して本文内容を読み取り、考えを形成する授業を構想・実践した。そのことによって、4時間という短い時数の中でも、生徒は幅広いテキストに触れ、内容の理解や解釈の深化にとどまらず、我が国の言語文化について自分の考えを形成することができた。

しかし、本研究の課題は、我が国の言語文化について考えを形成したと見取ることができたにもかかわらず、我が国の言語文化について学んだ実感を生徒に十分にもたせられなかったことである。ただ、言語及び言語生活並びに芸術及び芸能など幅広い分野にわたる我が国の言語文化についての考えは、一朝一夕に形成できるものではない。今後は、「我が国の言語文化の担い手としての自覚」（「解説」：109）をどのように涵養するか、更に検討していかなければならない。

本研究のまとめとして、以下に成果と課題を述べる。

2 研究の成果

- (1) 複数のテキストを読み比べる活動は、我が国の言語文化を理解しやすくしたり、文章を主体的に読む姿勢を育成したりする上で有効であった。
- (2) テキストから読み取ったことについて比較して論じる活動は、意見を外化し、相互に影響を与えながら、我が国の言語文化について自分の考えを形成する上で有効であった。
- (3) 異なる時代に成立した複数のテキストを「読み比べ、比較して論じる」言語活動を行うことで、我が国の言語文化について自分の考えを形成することができた。
- (4) (1)～(3)の成果により、「言語文化」において、従来型の「講義調の伝達型授業」を

脱し、我が国の言語文化について自分の考えを形成する授業の一例を示すことができた。

3 今後の課題

- (1) 言語及び言語生活並びに芸術及び芸能など幅広い分野にわたる我が国の言語文化についての考えをどの時期に、どのように形成するか、「言語文化」の年間指導計画の中で適切に設定する必要がある。
- (2) 単元の見通しや学習のすすめ方、振り返りの仕方などについての生徒と視点を共有するための工夫が必要である。あわせて国語科において、[主体的に学習に取り組む態度]をどう見取り、評価するかに関して更なる研究が求められる。

〈おわりに〉

長期研修の機会を与えてくださいました関係各位並びに授業実践にご協力いただきました所属校の諸先生方と生徒のみなさんに心から感謝申し上げ、結びの言葉といたします。

【注】

1. 「全ての領域」とは、〔思考力・判断力・表現力等〕の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域を指す。

VIII 引用文献および参考文献

【引用文献】

- ・一瀬大樹（2021）『新開設科目「言語文化」に向けた 現代文・古典のつながりを考える「読むこと」の授業研究』山梨大学教職大学院：186
- ・大島美幸（2021）『我が国の言語文化への関心を高める授業づくり』神奈川県立総合教育センター：24
- ・大学入試センター（2023）『令和6年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等（別添）出題教科・科目の問題作成の方針』大学入試センター（<https://www.dnc.ac.jp/>）：1
- ・中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』：124、127
- ・文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』東洋館出版：10、13、109、111、131、133

【参考文献】

- ・大島純・千代西尾祐司（2019）『主体的・対話的で深い学びに導く 学習科学ガイドブック』北大路書房
- ・船津啓治（2010）『比べ読みの可能性とその方法』溪水社

